

夏目漱石

変な音



変
な
音

上

うとうとしたと思ううちに眼が覚た。すると、隣の室^{へや}で妙な音がする。始めは何の音とも又何処から来るとも判然^{はつきり}した見当が付かなかつたが、聞いているうちに、段々耳の中へ纏まった観念が出来てきた。何でも山葵卸^{わさびおろ}しで大根^{だいこん}かなにかをこそごそ擦っているに違^{ちが}ない。自分は確^{たしか}にそうだと思った。それにしても今頃何の必要があ

つて、隣りの室で大根卸を拵こしらえているのだか想像が付かない。

いい忘れてたが此処ここは病院である。賄まかないは遥はるか半町も離

れた二階下の台所に行かなければ一人もいない。病室では炊事割烹かっぼうは無論菓子さえ禁じられている。況まして時ならぬ今時分何しに大根卸を拵こしらえよう。これはきつと別の音が、大根卸の様に自分に聞えるのに極きまっていると、すぐ心の裡うちで覚おぼったようなものの、さてそれなら果して何処からどうして出るのだらうと考えるとやツぱり分らない。

自分は分らないなりにして、もう少し意味のある事に自分の頭を使おうと試みた。けれども一度耳に付いたこの不可思議な音は、それが続いて自分の鼓膜に訴える限り、妙に神経に崇たたって、どうしても忘れる訳に行かなかった。あたりは森しんとして静かである。この棟むねに不自由な身を託した患者は申し合せた様に黙っている。寐ねているのか、考えているのか話をするものは一人もない。廊下を歩く看護婦の上草履うわぞうりの音さえ聞えない。その中にこのごしごしと物を擦り減らす様な異いな響だけが気になった。

自分の室はもと特等として二間つづきに作られたのを
病院の都合で一つずつに分けたものだから、火鉢などの
置いてある副室の方は、普通の壁が隣の境になっている
が、寢床の敷いてある六畳の方になると、東側に六尺の
袋戸棚があつて、その傍わきが芭蕉布ばしやうふの襖ふすまですぐ隣ゆきかよいへ往來
が出来るようになってゐる。この一枚の仕切をがらりと
開けさえすれば、隣室で何を為たているかは容易やすく分るけ
れども、他人に対してそれ程の無礼を敢てする程大事な
音でないのは無論である。折から暑さに向う時節であつ
たから縁側は常に明け放したままであつた。縁側は固もとよ

り棟一杯細長く続いている。けれども患者が縁端えんばたへ出て互を見透みとおす不都合を避けるため、わざと二部屋毎に開き戸を設けて御互の関とした。それは板の上へ細い棧を十文字に渡した洒落しやれたもので、小使が毎朝拭掃除をするときには、下から鍵を持って来て、一々この戸を開けて行くのが例になつていた。自分は立つて敷居の上に立つた。かの音はこの妻戸つまどの後うしろから出る様である。戸の下は二寸程空すいていたが其処そこには何も見えなかつた。

この音はその後ごもよく繰返された。ある時は五六分続いて自分の聴神経を刺激する事もあつたし、又ある時は

その半なかばにも至らないでぱたりと已やんでしまふ折もあつた。けれどもその何であるかは、ついに知る機会なく過ぎた。病人は静かな男であつたが、折々夜半よなかに看護婦を小さい声で起していた。看護婦が又殊勝な女で小さい声で一度か二度呼ばれると快よい優しい「はい」と云う受け答えをして、すぐ起きた。そうして患者の為に何かしている様子であつた。

ある日回診の番が隣へ廻まわてきたとき、何時もよりは大分手間が掛ると思つてしていると、やがて低い話し声が聞え出した。それが二三人で持ち合つて中々抄取はかどらないよう

な湿り気を帯びていた。やがて医者おなの声で、どうせ、そ
う急はつきりには御癒おなりにはなりませんと云った言葉だけ
が判然聞えた。それから二三日して、かの患者へやの室へやにこ
そこそ出入ではいりする人の気色がしたが、孰いずれも己れの活動
する立居を病人に遠慮する様に、ひそやかに振舞って
たと思つたら、病人自身も影の如く何時の間にか何処か
へ行つてしまった。そうしてその後あとへはすぐ翌あくる日ひから
新しい患者が入つて、入口の柱に白く名前を書いた黒塗
の札が懸易えられた。例のごしごし云う妙な音はとうと
う見極わめる事が出来ないうちに病人は退院してしまつ

たのである。そのうち自分も退院した。そうして、かの音に対する好奇の念はそれぎり消えてしまった。

下

三カ月ばかりして自分は又同じ病院に入った。室へやは前のと番号が一つ違っただけで、つまりその西隣であつた。壁一重隔てた昔の住居すまいには誰が居るのだらうと思つて注意してみると、終日かたりと云う音もしない。空いていたのである。もう一つ先が即ち例の異様の音の出た所で

あるが、此処ここには今誰がいるのだから分らなかつた。自分はその後のち受けた身体からだの変化のあまり劇はげしいのと、その劇しさが頭に映つて、この間からの過去の影に与えられた動揺が、絶えず現在に向つて波紋を伝えるのことで、山葵卸わさびおろしの事などは頓とんと思ひ出す暇もなかつた。それよりは寧ろ自分に近い運命を持った在院の患者の経過の方が気に掛つた。看護婦に一等の病人は何人いるのかと聞くと、三人だけだと答えた。重いのかと聞くと重そうですと云う。それから一日二日して自分はその三人の病症を看護婦から確めた。一人は食道癌しよくどうがんであつた。一人は胃癌であつ

た、残る一人は胃潰瘍いかいようであつた。みんな長くは持たない人ばかりだそうですと看護婦は彼等の運命を一纏ひとまとめに予言した。

自分は縁側に置いたベゴニアの小さな花を見暮らした。実は菊を買う筈の所を、植木屋が十六貫だと云うので、五貫に負けると値切つても相談にならなかつたので、歸りに、じゃ六貫やるから負けると云つてもやっぱり負けなかつた、今年の水で菊が高いのだと説明した、ベゴニアを持って来た人の話を思い出して、賑にぎやかな通りの縁日の夜景を頭の中に描きなどして見た。

やがて食道癌の男が退院した。胃癌の人は死ぬのは諦あきらめさえすれば何でもないと云って美しく死んだ。潰瘍の人は段々悪くなった。夜半よなかに眼を覚すと、時々東のはずれで、附添のものが氷を摧くだく音がした。その音が已やむと同時に病人は死んだ。自分は日記に書き込んだ。——「三人のうち二人死んで自分だけ残ったから、死んだ人に対して残っているのが気の毒の様な気がする。あの病人は嘔はきけ気があつて、向うの端から此方こっちの果まで響くような声を出して始終げえげえ吐いていたが、この二三日それがぴたりと聞えなくなつたので、大分落ち付いてまあ結構

だと思ったら、実は疲労の極きよく声を出す元気を失ったのだと知れた。」

その後患者は入れ代り立ち代り出たり入ったりした。自分の病気は日を積むに従って次第に快方に向った。仕舞には上草履を穿はいて広い廊下をあちこち散歩し始めた。その時不ふ凶とした事から、偶然ある附添ひるの看護婦と口を利く様になった。暖かい日の午過ひる食後の運動がてら水を仙の水を易かえてやろうと思つて洗面所へ出て、水道の栓を振ねじっていると、その看護婦が受持へやの室の茶器を洗いに來て、例の通り挨拶をしながら、しばらく自分の手にし

た朱泥の鉢と、その中に盛り上げられた様に膨れて見えるたまね珠根を眺めていたが、やがてその眼を自分の横顔に移して、この前御入院の時よりもうずっと御顔色が好くありませんでしたねと、三カ月前の自分と今の自分を比較した様な批評をした。

「この前って、あの時分君もやっぱり附添で此処に来ていたのかい」

「ええつい御隣でした。しばらく〇〇さんの所に居りましたが御存じはなかったかも知れません」

〇〇さんと云うと例の変な音をさせた方の東隣であ

る。自分は看護婦を見て、これがあの時夜半に呼ばれると、「はい」という優しい返事をして起き上った女かと思うと、少し驚かすにはいられなかった。けれども、その頃自分の神経をあの位刺激した音の原因に就ては別に聞く気も起らなかった。で、ああそうかと云ったなり朱泥の鉢を拭いていた。すると女が突然少し改まった調子でこんな事を云った。

「あの頃貴方の御室で時々変な音が致しましたが……」
自分は不意に逆襲を受けた人の様に、看護婦を見た。
看護婦は続けて云った。

「毎朝六時頃になるときつとする様に思いましたが」
「うん、あれか」と自分は思い出した様について大きな声を出した。「あれはね、オートストロップ自働革砥ひげの音だ。毎朝髭を剃そるんでね、安全髮剃かみそりを革砥かわどへ掛けて磨ぐのだよ。今でも遣ってる。嘘だと思ふなら来て御覧」

看護婦はただへええと云った。段々聞いてみると、○
○さんと云う患者は、ひどくその革砥の音を気にして、あれは何の音だ何の音だと看護婦に質問したのだそうである。看護婦がどうも分らないと答えると、隣の人は大分快いいので朝起きるすぐと、運動をする、その器械の音

なんじやないか羨うらやましいなと何遍も繰り返したと云う話である。

「そりや好いが御前の方の音は何だい」

「御前の方の音って？」

「そら能く大根だいこを卸す様な妙な音がしたじやないか」

「ええあれですか。あれは胡瓜きゅうりを擦すたんです。患者さんが足が熱ほてって仕方がない、胡瓜の汁で冷してくれと仰おしやるもんですから私が始終擦すって上げました」

「じややっぱり大根卸の音なんだね」

「ええ」

「そうかそれで漸く分った。——一体○○さんの病気は何だい」

「直腸癌です」

「じゃ到底とてもむずかしいんだね」

「ええもう疾とうに。此処を退院なされると直じきでした、御亡くなりになったのは」

自分は默然もくねんとしてわが室に帰った。そうして胡瓜の音で他ひとを焦じらして死んだ男と、革砥の音を羨ましがらせて快くなった人との相違を心の中で思い比べた。

日本文学電子図書館

文鳥・夢十夜

著 者：夏目漱石

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館